

学校物語 (国吉小の巻4)

—キツネの報恩(上)—

余木 令一

小学校の広場。ここは舟岡の台という。日国吉町のほほ中央に位してある。全体的にみるこの地形は舟のかつこうをして、いこのので、その名がつけられたのたそうな丘陵地だけに松、杉、モミ

その他の常盤(ときわき)は今も数多く立ちならんでいるが、むかしの面影はたいぶうすれて

人口増と学校教育の普及で校庭の拡張はこれまで何回かおこなわれ、樹木地帯がつきからつきへと切りひらかれたからた。事

実そのむかし、校舎の周辺には空ゆく雲を摩するような巨木

亭々とそびえたつていた。この小学校がはじめて建てられたときより、もつとすつと前にさかのぼれば、ここは狐狸(こり)のたぐいも棲(す)む森閑とした境地だつたらしい。ところで狐狸で思いおこすことがある。余談にわたるが次のような話がいい伝わつて

いるので書きとめておこう。時代はいつのことか定かではない。ある日のこと、舟岡部落に住む娘さんがこの森に入つて山仕事をしていた。彼女は、小憩(こやすみ)していたとき、前方にあたつて瀧木の茂みの間から金色にかがやく異様なものがうごめいているのに「ハツ」とした。息をのみ、眼をすえてじつとみると、それはまごうかたなく世に言う金毛九尾のキツネであつた。

キツネはあたりをしきりと警戒しているようすだつたが、何をおもつたのか、やがていすこともなくたち去つて行つた。彼女はその後所にかが伏在しているものと直

感じた。好奇心が手伝つてこわいながらもその場に近づいて行つた。ところがそこには今までうわさにも聞いたことのないホラ穴が一つあることを発見した。彼女はなにげなくその穴をのぞきこんだ。

その瞬間、彼女は二度びつくりした。ホラ穴の中にはキツネの仔(こ)が、数匹一団となつてかたまつていて、ではないか。彼女の仕事どころではなく、そいで山をかけおりた。胸のどいうきをおさえるようにして、いま見たことの人まつを部落の人たちが話した。たちまち皆んながあつまつた。このキツネをどう扱つたらよいだろうかとい

う相談のためである。協議の結果とはいえ、わけもなくその結論は出された。

(つづく)